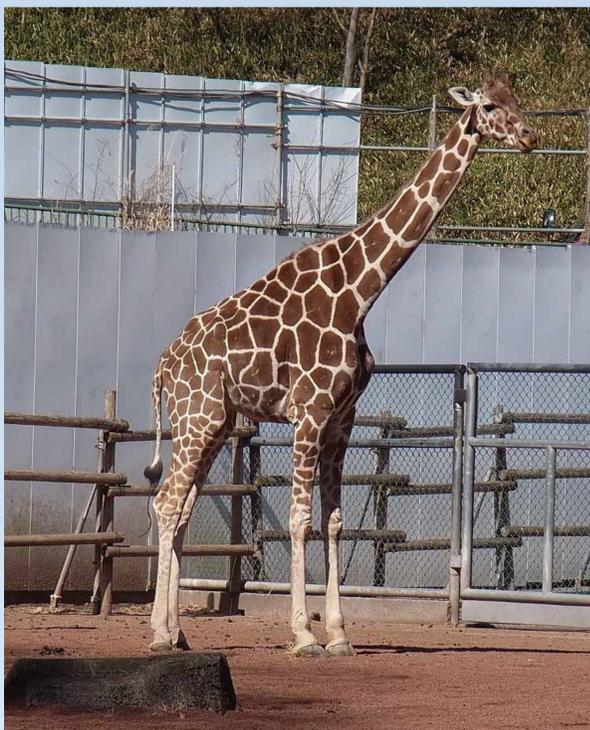


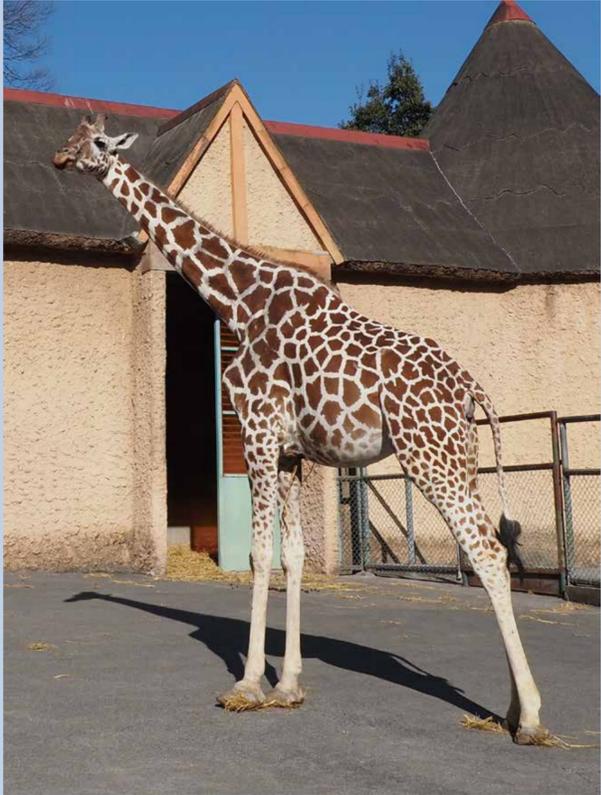
キリン（アオイ）

体が大きく、模様と色合いがとてもきれいなキリンでした。また、常に落ち着いた様子で佇んでいる姿が印象的でした。とても存在感があり、長らく多摩のサバンナを象徴するキリンでもありました。



キリン（サザンカ）

小さい頃はいつも母親のボタン、姉のアオイの後ろについて一緒に歩いていました。係員に触られるのが好きではなく、近づき難い一面がありました。子どもに恵まれませんでしたでしたが、他のキリンの子どもに頼られる存在でした。



キリン（ユーカリ）

とても穏やかな性格のキリンでした。7頭の子どもに恵まれましたが、どの個体も母親ゆずりの性格で、群れ全体が穏やかな雰囲気になるほどの影響力がありました。



グレビーシマウマ（ライチ）

お母さんになっても子馬のようにやんちゃで、いつも元気いっぱいの個体でした。4頭の子どもたちは全国各地で活躍しています。国内のグレビーシマウマの繁殖に大いに貢献しました。



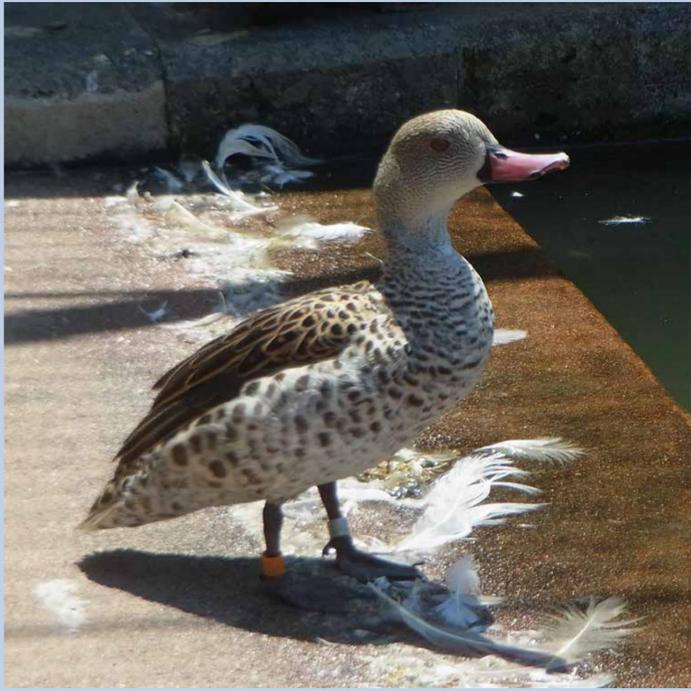
シロオリックス（ペペ）

流産や、生まれた子の死亡など悲しい事もありましたが、末娘のビビを立派に育てあげました。死亡する前に一度だけ起立不能となりましたが、その後は担当者の手を煩わせる事なく群れの中で過ごし、静かに旅立ちました。



アフリカゾウ（アコ）

半世紀以上、多摩動物公園でくらしした日本最高齢のアフリカゾウ。エピソードを挙げればもはや枚挙にいとまがありませんが、“手のかかる子ほどかわいい”とは、まさにアコのことだと思います。



アカハシコガモ（右橙）

2003年の2月に生まれ、フラミンゴと共に19年の月日を過ごしました。晩年は両目ともほとんど見えなくなりましたが、飼育係の声や音を頼りに近くまで寄ってきて好物のオキアミをよく食べていました。



ハクビシン（リュウ）

晩年は白内障を患っていましたが、木に登ることもでき、最後までハクビシンらしい姿を見せてくれました。同居しているジロウと、いつも2頭で寄り添って眠っている姿が印象的でした。



ニホンザル（ミドリ）

1987年5月12日生まれ、2021年12月2日に34歳6か月で死亡しました。これは、多摩動物公園サル山の最長寿記録になります。いつも娘のスポヤを気にかけて、良く毛づくろいをしてあげていました。



ニホンザル（スエズ）

1999年5月2日にミドリの仔として生まれ、2022年4月10日に22歳で死亡しました。普段は控えめでしたが、危険が迫ると果敢に外敵へ立ち向かう姿が印象的でした。



コツメカワウソ（カワちゃん）

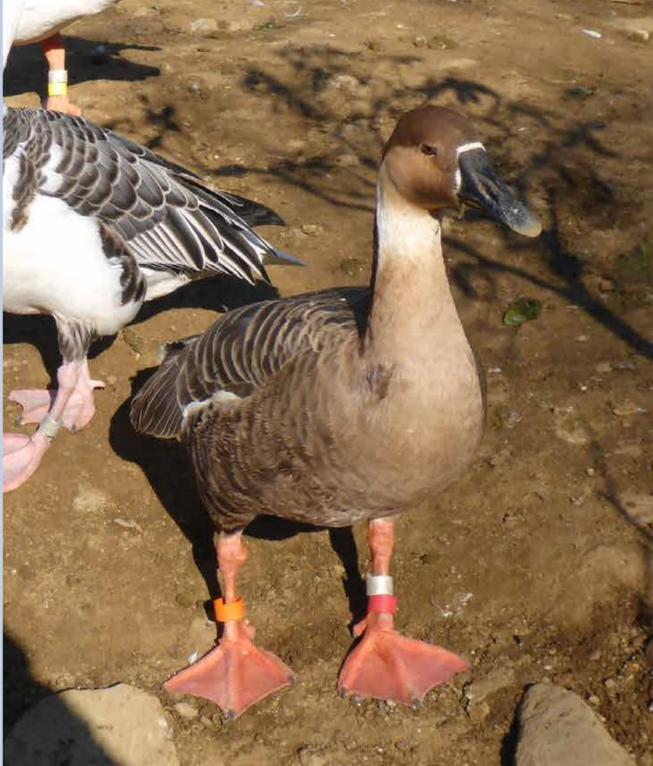
多摩で初めて飼育することになったコツメカワウソです。ペアのゴンタをリードし、子宝にも恵まれ、私たちを楽しませてくれました。

カワちゃん、ありがとう！



コアラ（コタロウ）

来園してから半年ほどの間、あまり動かず周りの様子をうかがう慎重な性格でした。他のコアラよりも毛が短く、肩から臀部にかけての毛色が黒っぽい色から薄い色へのグラデーションが美しく、手足が長いモデル体型のかっこいいコアラでした。



サカツラガン (T-1575)

のんびりとした独特の雰囲気です。飼育担当者を和ませてくれました。最後まで凛とした姿勢は立派でした。



カイウサギ (コンブ)

2010年からずっと一緒に飼育していたウサギ（オカカ）が2019年に死亡した後は、寂しそうな反面、自分のペースでのんびりとくらせていたのではないかと思います。怒ったり甘えたり色々な表情を見せてくれるとても可愛らしいウサギでした。